

梶井基次郎

奎吉



奎^{けい}_い

吉^{きち}_ち

「とうとう弟にまで金を惜りるようになったかなあ。」
 と奎吉は、一度思いついたら最後の後悔こうかいの幕まで行って
 みなければ得心の出来なくなる、いつもの彼かれの盲目的な
 欲望がむらむらと高まって来るのを感じながら思った。
 彼にとってはもうこうなればその醜みにくい欲望が勝かちを占し
 めてしまふに違ちがいなかつた。彼は彼で秘ひそかにそれを見越みこ
 して、それを拒否きよひする意志の働くのを断念する傾かたむきが
 出来ていたのだつた。

彼は今金がつかんでみたくて堪たまらないのであつた。しかし正当の手段でそれをこしらえるめどは周囲のどこにもなかつた。

彼は両親から金を持つことを許されていないのであつた。どうして奎吉がそんな破目になつたかといいえば、それは彼のような性格の人間には当然な経緯いきさつの結果なのである。

——彼は二度続けて落第したため、最近まで籍せきをおいていた高等学校を追われた。

あらゆる徳目と両立しない欲望が、またしてもまたし

ても彼のちっぽけな意志を押し流した。彼の理想や彼の
両親の願望の忠臣である彼の意志なるものはあまりに弱
かったのである。彼はそのたびに後悔し誓った。しかし
回を重ねるにつれて、放埒の度はだんだんはげしくなっ
た。結局彼は引き摺られるところまで引き摺ってゆかれ
たのだ。——そして彼は字校を追われたのだった。
「お父さんも今度という今度は本当に慍おこっていらっしや
る。」と奎吉は母に云いきかされた。

「お前の心が改まったとわかるまで家へ置いてお小遣こづかい
をやらないと云ってるからお前もそのつもりでいなさ

い。それから将来の身の振方も考えておおき、家ではもう学校へはやらないつもりでいるから。」奎吉はしかし「はい。」とは返事が出来なかつた。が、彼の自由になる金が途絶えた生活は続けられて行つた。

しかし彼はそろそろ金が欲しくなつて来た。彼は毎日散歩と称して、息詰いきづまるような家の空気から逃のがれ出た、しかし金を持たずに街を歩くのは彼の憂鬱ゆううつを増させるばかりであつた。

そしてその生活の二十日目ほどにあたる今日きょうという今日は金のことばかりで思いわずらつていた。売つたり質

屋へ持ってゆくものは何一つ見当らなかつた。あつても到底とうてい五十錢銀貨一枚つかめそうになかつた。そして最後に弟の貯金のことにふと気がついた時で彼はもう矢やも楯たてもたまらなくなつた。

非常に卑いやしいことだと心に否定しながらもその欲望に身を委まかせてしまう時、人はこの奎吉のような感じを抱いだくのであろうか。何にせよ奎吉はそのとき変な感じを経験したのである。それは単に感じに止まっていたのであつて、何らの成心も必然そこに働いていたのではないようであるが、私はそこに人間が自分の卑かばしさを庇かばおうとす

る意志が、感ぜられないながらも働いているのではないかと思う。事実それは（せめてこの感じがするようなら俺も真から卑しくはないのだ）と自分自身に断りを云うことが出来るその証拠しやうこになるのだから。

とにかく奎吉がその堪たまらなく嫌いやなことをやろうとした時、（いよいよ俺はやるな。）——何だかそこに第二の奎吉というものがあって本来の奎吉には何の申訳まげけもせずかたわらにそれをやり通す、そして本当の奎吉は傍かたわらからそれを眺ながめているというような想像がふと起つたのである。

彼の弟であるその莊そう之助のすけは彼の父の外妻がいしやうの子なので

あつたが、その女は莊之助の十歳さいほどの時死んでしまつたのを父は彼を八分の家へ置いて早く一人前にさせて、莊之助の祖母そぼにあたる人間を養うことが出来るようにしてやろうと思つて兄弟きょうだいの仲間入りをさせたのである。

しかし誰も彼もが不完全であつて、家の中は父が空想していたような調和がとれなかつた。そして誰も彼もが自分の狭きょうりよう量や不完全を感じる機会が多かつた。結局不幸なのは莊之助であつた。

莊之助は最近に高等小学校を卒業して、ごく少しの間父の知り合いの店へ見習いに行つていたのだつた。しか

し病弱でもあるし、当人もあまり気が進まず、父もそれを可愛かわいそうに思つてまた家で紺飛白こんがすりを着せて遊ばせてあつた。奎吉がふと思いついたのはその莊之助の金を借りることだつた。莊之助は最近見習いに行つていた店から歸る時、そこの主人から包み金を渡わたされた。そして彼の貯金には彼や彼の祖母が、幾度いくども空想していた種類の莊之助自身の金加わつた訳であつた。

奎吉自身としてもそんな貯金から借りるのはどうしてもいやであつた。それに彼が今まで勝手きままに押おさえつけて来た弟にとって奎吉のその申し出が輕蔑けいべつとなつて価

するだろうとは奎吉は知っていた。そして奎吉は苦しんだ。しかしこの際奎吉は手段などはどうでもいいほど金が欲しかった。その欲望はますます巨大きよだいに膨れ上ふくって、奎吉の良心を窒息ちっそくさせてしまいそうになった。彼は非常に気を重くさせてしまった。何だか訳のわからないものの中にいるような気がした。が、とうとうその欲望が勝を占めた。その瞬間しゅんかん奎吉は第二の奎吉というようなものがその醜こういい行為こういをするのを傍観ぼうかんするような、そして自分の声をさえ一方から傍聴ぼうちようするような空想を起しながら、莊之助に呼びかけてしまった。

「おい、莊之助、ちよつと。」

そう云つてしまつた時、彼はその声が非常に不機嫌ふきげんに重々しく響ひびいたと思つた。

雑誌に読み耽ふけつていた莊之助は、兄の視線の下で、身体からだを起しながらも、その頁ページから眼めをはなさず、それでも兄のいらいらしている視線にゆきあたつた時、機嫌をとるような作り笑いをして近づいて来た。

それが何か用事を云いつけるような時だと、そんな笑顔などは恥はじて消えてしまうほど、ますます不機嫌な顔をして、ぶつきら棒に「新聞とつといで」とでも云うの

であるが、奎吉は莊之助の視線に会うと危く目をそらそうとした。奎吉は何だかもやもやしているものの中に閉じ込められているように思った。しかし努めて顔を無表情に装いながら、彼の弱味を見られまいとした。

「お前の貯金から少し金を出して来てくれ。急に入用が出来たんだが、お母さんが今使いに行っていないから。」
彼がやっとそれを云い終えた時には、さきほどの変に歪められた（このような事件が今起っているのだな。）という想像の気持がまるつきり影を消していた。

莊之助は舞台上の人物が傍白を云う時のように一度

目を横へそらせて「ああ」と云つてうなずいた。奎吉は不幸にもその時の莊之助の顔に浮うかんだ微笑びしょうの影に、奎吉をなぐさめるような柔やさしい感情の表れがあつたのを見逃のがせなかつた。

その人間にその由し出が拒絶される時の氣不味きまざさを氣遣づかいながら、恐る恐る金を貸してくれと他人に云う時に奎吉がいつも顔面に感じたあの堪らなく嫌な顔つきが、奎吉の努力を裏切つて、ここへも出たのではあるまいか、そして莊之助は俺おれのその顔から、俺の苦痛をヒューメイ
ンにも知つて、あんなに柔しい顔つきをしたのではある

まいかと彼は疑った。しかも彼は莊之助のその顔を生意気に思い、いまいまして感じた。

「お前通帳と認印は自分で蔵しまってるんだね。じやすぐ行って五円出しておいで、そしてこんなこと知れると少し都合が悪いから、俺が返すまで誰にも云うんじやないよ。いいかい。その代り返す時には六円にして返してやるからな。」

奎吉は最後の醜さを出してしまった。しかし彼はどうしても口止めをせずにはいられなかったのだった。

莊之助はそれを領うなずきながらきいていたが、おしまい

に云い難くさを切り抜けるようにしてこう云った。

「何も余計にして返してもらおうとは思わないけど、確かに返してくれるのだっただら……。」

奎吉は本当過ぎるほど本当なそんな弟の言葉にはまったく参らされた。思いがけなくも卑しい利息のことなどを云ったのを、堪らなく恥かしく思った。金を返すにしても父がくれるようにならなければどうせ返せないのだし、金が手に入っても右左にそれを返すにはどうしても目をつぶって自分を麻痺させなければ、惜しくて堪らなくなる自分の性質を省ても、莊之助の言葉は本当過ぎる

くらしい本当であつたので。

莊之助が出て行つてから彼は堪らない場面をととうとうやり過したという気がしたが、次々に盛り上つて来る嫌悪の感じにいたたまらなくなつた。そして変なことに、彼は舌をべろと出してみた。そして次には「やった、やった」と小声で云いながら踊るおどような真似まねをした。彼はそれでもあきたらなかつた。最後に奎吉は「うー」と云いながら顔を思い切つてしかめた。なおもなおもひどく。なにかその顔面筋肉の収縮しゅうしゆくの感覚に快感があるかのよ

うに。

(大正十二年五月)

日本文学電子図書館

「梶井基次郎 ちくま日本文学028」

著 者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年11月10日 第1刷



日本文学電子図書館